

「オトツイ」と「オトトイ」の消長

—方言会話体と文章体との分化と統合—

江 端 義 夫

はじめに

「一昨日」の方言事象史について、『日本言語地図 6』^洋の解説では、次のように述べている。

函図（〈筆者注〉「一昨昨日」と「一昨日」のこと）を逆覧して巨視的な立場に立つとすれば、まず、東日本、九州西半に広い領域を占める、オトトイ、オトテなどの非破擦音の末尾音節を持つ類と、それを分断する形で中央部に分布する破擦音類との対立がまず目につく。オトトイ類が古く、オトツイ類が新しいというのが、さしあたっての周圍論的解釈である。（傍線部は、筆者による。以下、同じ。）

この問題の音は、古形「をとつひ」の助詞の「つ」とつながりをもつ。古くは「つ」が「E」であったとされるものであるが、この「つ」「E」が、一方では「e」に、他方では「ts」に変化していった現状ができあがった、ということ

になる。

ただし『日本国語大辞典』によれば「後撰集」「源氏物語」に「おととひ」があるというから、前音節の影響などから「つ」「E」が「と」「e」にかわる傾向が、古くは近畿地方でも行われたらしい。

なお、函図の作図にあたっては〈併用処理〉は行わなかった。オトトイ、オトツイのいずれにもへ上品、希、共通語的、新しいなどのいわば標準語的であるとすする注が見られ、あえて削除するのは惜しまれたからである。併用地点のうち、岐阜、長野南部から東海地方にかけては、オトツイを標準語的とする注が多く見られ、逆に中国・四国・九州の各地ではオトトイにその注が多く見られた。

以上の解説では、特に、傍線を施した二箇所の a、b が注目される。

右の文章の五年後、一九七九年に中公新書の一冊として『日本の方言地図』^洋がまとめられた。その中に、「おととい（一昨

日)——文体の分担——の項目がある。これは野元菊雄氏が執筆されている。先の『日本言語地図 6』の解説の内容を踏襲しつつも、独自の解釈が打ち出されているようである。野元氏の文章には二つの特色が指摘される。その一つは、先の解説における「オトツイ」と「オトトイ」との史的先後関係と全く反対の解釈を示しておられる点である。すなわち、ご論の冒頭で、

文献上古い形は「をとつひ」で、「万葉」にも出ている。

今、地図で見ると、九州の西や南を除くと西日本がオトツイで、東日本がオトトイとなっているから、東日本や九州西南部のオトトイの方が新しいことになる。

と述べられ、東日本や九州西南部に分布する「オトトイ」を方言圏論的な分布とは見ないとしておられる。つまり、野元氏は東西対立分布と解釈されたのである。そして、次のように、相互乗り入れの状況を説明された。

東日本ではオトトイ、西日本ではオトツイがそれぞれ日常のことばであり、それに対して新しく入ってきた語の方が、改まったことばとして意識されながら、オトトイの領域へオトツイが、オトツイの領域へオトトイが相互に侵入しあっている。原則として、新しい形の方がより上品と感ぜられるようである。

以上のように、「オトツイ」と「オトトイ」との史的解釈については、傍線部 a と傍線部イとが全く反対の記述になっている点が問題とされる。又、傍線部 b では「標準語語のか否か」の「意識差」で解釈しているのに対して、ロではそれを、語の「文体の分担」と

いう「文体差」で解釈しようとしている点に、相違が見られる。

ところで、両者に共通するのは、「オトトイ」と「オトツイ」との境界地帯である中部地方や、中国・四国・九州地方で、人々がどのような言語意識によって、それらの二語を使い分けているかという点に関心を置いておられることである。「日本言語地図」には、残念ながら話者の説明が載っていない。私どもは、それを想像するしか方法がない。しかし、両者ともに、記述の中で、境界地帯における人々の併用語形(併存事象)についての説明に言及され、それに基づいて考えを深められたことが記されている。

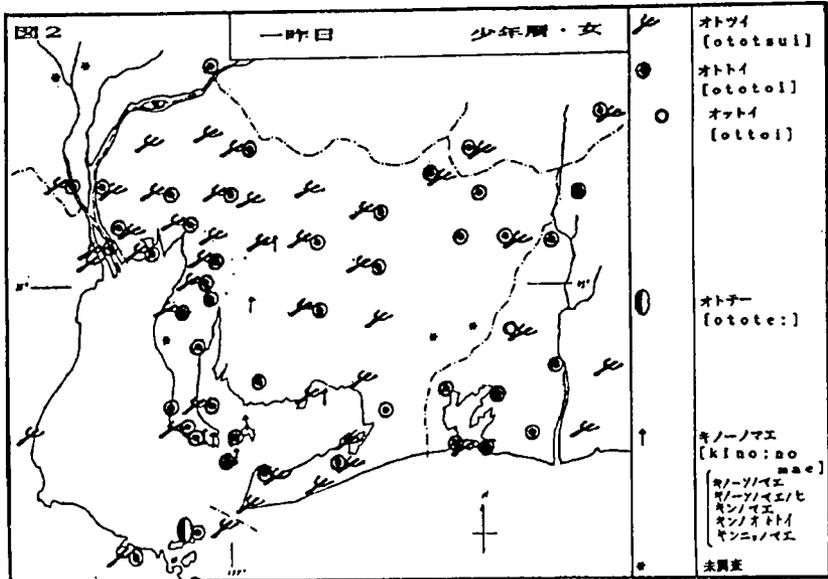
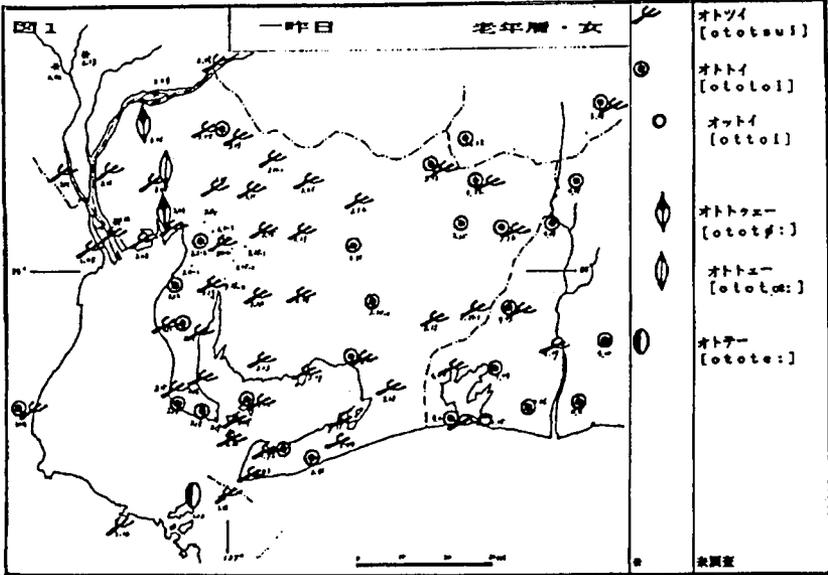
さて、対立する二説に対して、納得のいく第三の回答を提出するためには、どうすべきであろうか。種々のやりかたがあるうが、「オトツイ」と「オトトイ」との境界地帯の方言地図について、年層別の分布を考察し、言語推移の様を客観的に説明することが一つの穏当なやり方かと思われる。

そこで、当該語形の境界地帯、つまり併用語形の見られる愛知県地方の方言について、以下では、老年層と少年層との方言分布を比較し、筆者なりの考えを述べてみたい。

一、愛知県地方の方言における「一昨日」の方言分布

(一) 愛知県地方の方言における「オトツイ」の分布

図一には、フォークの形の符号で「オトツイ」が示されてい



る。三重県から愛知県の全域にまで、「オトツイ」の分布が見える。さらに、静岡県県の浜名湖沿岸にもこれがある。しかし、天竜川の東側にまでは及んでいない。天竜川の上流の静岡県側では、まだ「オトツイ」が行われていない。こうして見てくると、「オトツイ」は、西部から東部へ向けて突き進んで来ている事象だということが見取される。

さて、図2で、少年層における「オトツイ」の分布を見てみる。「オトツイ」の勢力は、決して衰えていない。三重県・愛知県の隅々にまで、「オトツイ」の符号が見える。さらに静岡県地方では、天竜川の東側にも、「オトツイ」が分布している。先の図1の老年層図では、天竜川の西側に「オトツイ」が分布していただけで、川を越えた東側にはそれが見られなかったのとは、対照的であることが注目される。したがって、「オトツイ」が、図2の少年層においては、天竜川を越えて東部にまでも伝播してきていることを、事実として証明したことになる。これは、ちょっとした発見である。「オトツイ」の東征”とも、「オトツイ」の東進”とも言うてみたい。この点は、推定ではなくて、確実な言語推移の事実として、指摘することができる。

(二) 愛知県地方の方言における「オトツイ」系事象の分布

「オトツイ」には、多様な事象が見られる。図1では、著名な連母音の同化が、尾張北部の三地点に見られる。

「オトツイ」が「オトトウェー」[ototue:]や「オトトエー」

[ototue:]に近い音で表現されている。これらは、もはや残存的であり、まさに名古屋文化圏の中心地に見られるだけで、知多半島や瀬戸市の方には聞かれなくなっている。

「オトツイ」を「オットツイ」と促音化する事象が、図1では静岡県の舞阪で1地点にだけ分布している。他方、図2の少年層では、「オットツイ」が静岡・愛知の県境の静岡県側に見られる。

【図説 静岡県方言辞典^註の「おととい」の図によれば、「オットツイ」が静岡市を中核とした新しい勢力として、沿岸から内陸へと進攻しようとしているのである。そして、「オットツイ」は静岡県の全域に根強く分布していた「オトツイ」と併存する形で、まばらに分布している「オトツイ」との間へ、攻め入ろうとしているかに見える。静岡県下では、古くからの隆盛な分布を示す[ototue]があり、確実な勢力として、所々で「ototue」が併存している。また、[ototue] v [ototue]の縮約現象によって生じた新事象「オットツイ」が興隆し、三事象が互いにせめぎ合い、格闘しているのである。

すぐ隣の愛知県での「オトツイ」系事象の分布状況では、「オットツイ」はまだ、老少ともに受け入れられる態勢にはなっていない。しかし、「オットツイ」が早晩、愛知県の方言をおびやかす時が来るかもしれない。

いま、最も栄えているのは、「オトツイ」という事象である。「オトツイ」は、現代の共通語形である。

図1によれば、この「オトツイ」が静岡県を中心、三河と知多半島とに分布している。しかし、名古屋市を核とした尾張の平

野部には、これが見られない。三重県側にも、「オトトイ」は稀である。「オトトイ」よりも、「オトツイ」の方が盛んなのである。

図2の少年層における「オトトイ」は、その分布が、尾張地方の全域に見られる。また、「オトトイ」は、木曾川・長良川を越えて西の方にまで進攻しているようである。「オトトイ」の分布勢力が、西方へ西方へと伸びている様子が分かる。それと同時に、老年層では三河地方で「オトトイ」の分布が薄かったが、少年層では、その分布量が増した。

「オトテー」は「オトトイ」の連母音が相互同化を起こしたものである。これが三重県の島に残る。古い事象が比較的自由に変化し、同化形のまま残存したものと理解される。

さて、以上の「オトトイ」系諸事象の分布状況の中で、最も注目すべきことは、図1における「オトトイ」のまばらな分布と、それに対立した、図2の少年層における「オトトイ」の隆盛な分布とについてである。しかも、図2の少年層では、「オトトイ」が尾張地方の西部から三重県にかけて、分布地点を増やしているのである。巨視的に見れば、図1と図2における「オトトイ」の増加量は、あまり目立つほどではないかもしれない。しかし、少しずつではあるが、愛知県西部では、「オトツイ」から「オトトイ」へと変化しようとしているのである。

(三) 愛知県地方の方言における「オトツイ」と「オトトイ」の併存分布について

ことばを変化させる力の一つに、使用者の価値意識がある。「オトトイ」と「オトツイ」との併存地点で、それらはどのような使用差を生んでいるのであろうか。それを考えることによって、ことばの変化の方向を推定することができるであろう。

図1では、「オトツイ」と「オトトイ」との併存地点は11地点である。音訛形（「オトトウエー」と「オトトエー」と「オトテー」と「オットイ」）は、「オトトイ」の中に含めて考えられる。その併存状況は、次の通りである。

〈老年層図〉

「オトツイ」が優先的または初回答であり、「オトトイ」が付随的である地点 3 地点。

「オトトイ」が優先的または初回答であり、「オトツイ」が付随的である地点 9 地点。

併存地点の合計 12 地点。

〈少年層図〉

「オトツイ」が優先的または初回答であり、「オトトイ」が付随的である地点 16 地点。

「オトトイ」が優先的または初回答であり、「オトツイ」が付随的である地点 10 地点。

併存地点の合計 26 地点。

これらの作業によって次の二つのことが言える。一つは、老年層図では「オトトイ」か「オトツイ」かの、単独分布が多かったのに対して、少年層図では、それらの併存分布が極めて多くなっているという特徴である。少年層図では、老年層図でよりも二倍以上の割合で、併存が目立つ。それほどに、「オトツイ」も隆盛を保ちつつ、西方へ弘布しているのである。二つめの特徴は、上記の併存状況の数字が表しているように、「オトツイ」が優先的または初回答であり、「オトトイ」が付随的である。”ような地点が多いということである。この相関の関係をもちつ地点は、老年層が3地点であったのに、少年層では16地点にも増えているのである。いかに少年層者にとつて、「オトツイ」の勢力が甚大なのであるかが、知られよう。しかし、ここでも、「オトツイ」だけの単独の分布は極めて稀である点を、確認しておかなくてはならない。つまり、「オトトイ」と「オトツイ」のいずれか一方が、他の意味領域をも包含することにはなっていないということである。併存しつつ対立しているのであり、「オトツイ」が東へ漸移し、「オトトイ」が西へ漸移しつつあるということが、背後の動向として、見通されるのであった。

ところで、同じ意味内容を表すのに、二つの事象が並立しているとは不都合である。それらはどのように使い分けられているか。伊勢市神戸町の老女は、“本当は「オトツイ」かも知れないが「オトトイ」と言う。”と説明された。愛知県と三重県との境界地帯では、「オトトイ」の西進する力が強いので、このような興味深いコメントが得られたのである。おそらく、東海地方のかな

り広い地域（特に尾張・伊勢）で、「オトツイ」が標準語だと思いつつも、周りの人々のことばを真似て「オトトイ」を使用するという人がいることであろう。

しかし、三河地方の奥の北設楽郡武節町外田では、「オトトイ」とオトツイの両方を使うが、主にオトトイを使う。”と老女が説明された。上の言説で代表されるように、三河地方には、東日本で主勢力をもつ「オトトイ」が、潜在的な基盤を備えているようである。

二、文献資料に照らしてみた「オトツイ」と「オトトイ」との相剋

先に、愛知県地方の方言分布における「オトツイ」と「オトトイ」との競合について分析した。これと同じ作業が、各地方ごとに可能であれば願わしい。しかし、いまはその段階に至っていない。

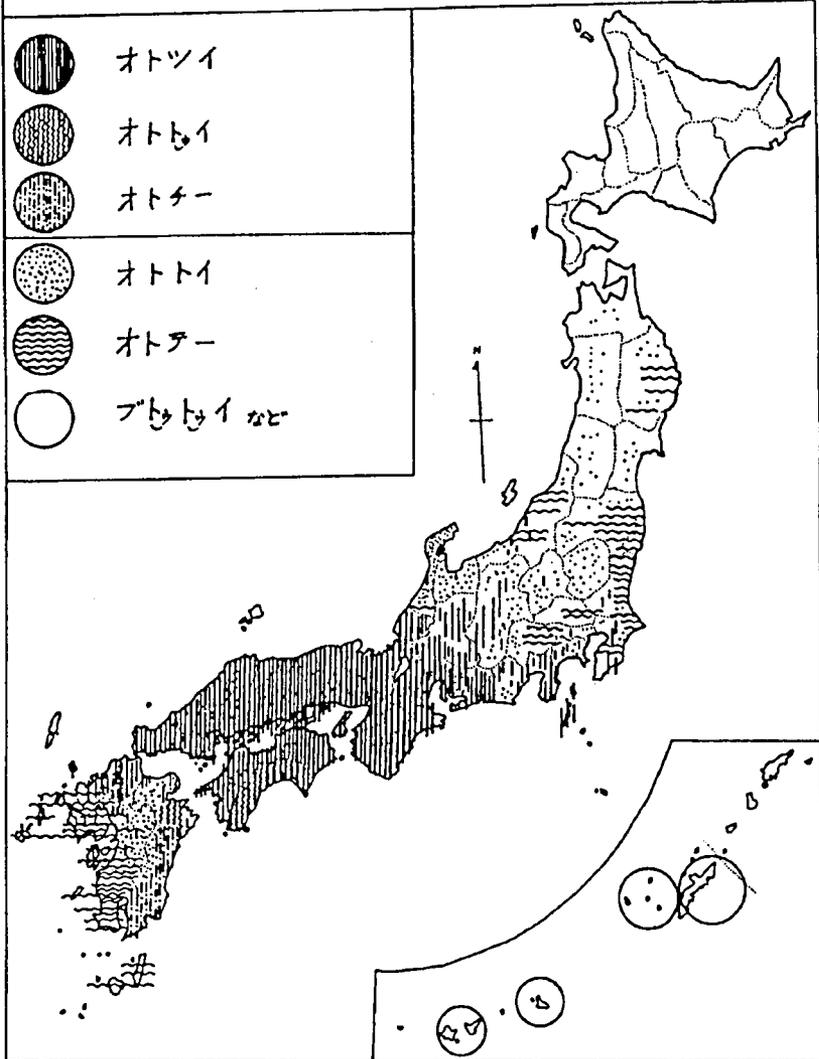
そこで、粗雑ではあるが、若干の文献を調査し、かつ、既刊の方言地図にも当たって、穏当な解釈へ辿り着きたいと考える。

(一) 現代日本の方言における「オトツイ」の分布状況

図3では、「日本語地図 6」の中の「二昨日」の図を基として、「オトツイ」系と「オトトイ」系とを見分け、それらの分布の概略図を作製してみた。

図3 オトトイとオトツイ（「日本言語地図」による）

老年層



まず初めに、全日本における「オトツイ」の方言分布状況について考えると、全日本から始める。

図3によれば、「オトツイ」は近畿・中国・四国に著しい分布が見られ、九州では「オトチー」という形で東半域にその分布が、辿られる。この「オトツイ」は、岐阜県・愛知県にもまばらな分布が見られ、長野県や静岡県へと、次第に分布が薄くなりつつ、神奈川県や千葉県・埼玉県にまで続いているようである。八丈島にも力強く分布している状況を見ると、「オトツイ」が、さほど新しい事象とは言えないものであることなども、確認できる。

では、今日の西日本で極めて隆盛な分布を見せる「オトツイ」は、一体、どういう経緯をたどってきたのであろうか。一見、謎に包まれたような運命を感じさせる「オトツイ」について、十分ながら、周辺の文献にあたって調べてみた。その結果に基づいて、「オトツイ」の消長を、以下に考察してみたいと思う。

(一) 上代の文献に見出される「をとつひ」について

「オトツイ」の語源を、「ヲトツヒ」と註した辞書が多い。たとえば、大槻文彦の『新訂大言海』には、次のように記されている。

をとつひ(名) 一昨日ヲトツヒノ「遠之日ノ転ト云フ」又、をととひ。

昨日ノ昨日。イッサクジツ。

さらに、『新潮国語辞典』には、

おとつひ(一昨日) (一遠(ヲチ)つ日)の転という。いっさくじつ。前々日。

とある。もうこれ以上、他の語源説に依る必要もあるまい。では、「ヲチツヒ」が、実際に存したかという点、否である。だから、上代の文献では、「ヲチツヒ」という語形のままでは、探していない。ただし、「遠(ヲチ)」は、『万葉集』において、

〈遠方(ヲチカク)〉

3399 隠口こもりぐちの泊瀬はつせの川の彼方あつたに妹らは立たしこの方にわれは

立ちて

〈遠近(ヲチコチ)〉

3622 妹も兄も若き兒どもは彼此あつちに騒ぎ泣くらむ玉梓たますしの道をた遠とほみ

のように見出される。しかも、「ヲチ」に助詞「ツ」の接合した語も見られる。

〈遠(ツ)方(ヲチツカク)〉

宋齊已降遠方迄干梁隋〔文鏡秘府論・南・保延点〕 (『新潮

国語辞典』による。)

こうなると、次に、現代の「オトツイ」に転じるためには、「ヲチ」↓「ヲト」の相通の語例が必要である。これの好例が、『古事記』下巻、清寧天皇の条に見える。

〈遠方⇄彼方〉

爾に袁神命も亦歌垣に立ちたまひき。是に志毘臣歌白ひけらく。

大宮の 彼たつ端手 隅すみ傾かたけり

とうたひき。

以上の例によって、「ヲチツ」が「ヲトツ」に交替する。この蓋然性が、確かめられた。

次に、「ヲトツ」の「ツ」は連体格助詞で、上代の『万葉集』には、特定の語の複合形を作る際に、用いられているものである。たとえばそれは、次の通りである。

1205 「沖」楫」 / 222・247・939・1206・1395・2732 「沖」波」 / 153 「沖」權」 / 162・2342・2437 「沖」藻」 / 3597 「沖」白波」 / 813 「沖」深江」 / 3016 「沖」風」 / 3867 「沖」鳥」 / 3079 「沖」王藻」 / 38・2165 「上」瀬」 / 431 「奥」城」 / 871・3089 「遠」人」 / 1050 「現」神」 / 1157 「時」風」 / 1359 「向」岡」 / 2304 「秋」葉」 / 1781 「海」路」

これらを見ると、必ずしも全てに共通する傾向ではないけれども、「沖」は「遠」のようなのは、自然界(空間)や時間の遙かなことを承けて、次の語と承接する語構成法で、語の複合に参画していることが分かる。すなわち、「AのB」という複合語の形成においては、「AツB」という在り方をとる。具体的な意味がBで示され、前接するAでは、Bの空間的、時間的、地理的屬性や背景が内包されているのである。

さて、奈良時代には、「をとつひ」が既に『万葉集』中に、次のように見出される。

1014 前日^{まへひ}も昨日^{けふ}も今日^{けふ}も見つれども明日^{あした}さえ見まく欲しき君かも

右の一首は橘宿禰文成 即ち少卿の子なり(巻6)

のなり

紀朝臣男梶の、詔に応ふる歌一首

324 山の峽其処とも見えす一昨日も昨日も雪の降れば

(平登都日) (巻17)

4011 汝が恋ふるその秀つ鷹は松田江の浜行き暮し^こ取る氷見の江過ぎて、多古の鳥飛び徘徊り、葦鴨の多集く古江に、平等都日も昨日もありつ、近くあらば今二日だみ遠くあらば七日のをちは過ぎめやも、来なむわが背子、想にな恋ひそよとそ、夢に告げつる(巻17)

以上三例の「をとつひ」(一昨日)は、「先日」の意味ではなくて、暦日を刻む「一昨日」の意味で使用されていることは、歌の文脈から十分に理解される。それと共に、4011の歌には、「七日のをち」は」とあって、「をち」が「時間的な隔たり」とか、「以上」とか、「離れて」の意味で用いられるものであることも、示唆している。

また、橋本進吉博士のご論考「奈良朝及びそれ以前の国語の音声」によれば、「をとつひ」は、[woitɔuɸi] (をー平、wo:とー乙類、の登、ɔ:、つー都、w:、ひー甲類の日、ɔ:又はɔ:)であったらしいのである。この発音の語が、巻14や巻20の防人歌のところではなくて、巻6や巻17に見られる点で、近畿地方での共通語であったとみられる。また、「一昨日も昨日も」と慣用的な使い方で、歌の中に用いられている点から見て、「昨日」とい

う語と同等の品性をもっていたと考えてよい。したがって、「をとつひ」に、「卑俗さ、田舎らしさ、新奇さ、古めかしさ、滑稽さ、上品さ」といったものを、特別に意味付与する必要はないであろう。「一昨日」を言い表すときに、「をとつひ」に替わる語が別に存在して、それとの間で使い分けがあったとは思われない。この当時の近畿中央での通用語として、「をとつひ」が行われていたものと考えられる。

しかし、平安時代になると、どうしてか、「をとつひ」が文献上から姿を消して、「をととひ」ばかりが使用されている。奈良時代のいつごろから、「をとつひ」が「をととひ」に変化したかは分からない。平安時代に入ってから、上記の交替現象が生じたのか、文献資料が不十分なために、継年的に辿ることはできない。ただし、奈良時代にすでに、「つ」と「と」との相通が存したことは、明らかにされている。たとえば、有坂秀世博士は、「古音推定の資料としての音相通例の価値」という論文の中で、次のように述べておられる。

奈良時代の日本語には、マスミ・マツミ（真澄）ツガ・トガ（梅）タツキ・タドキ（手着）ツヌ・ツノ（角）のやうに、同じ語が《u》を含む形と《o》を含む形と二つの形で現れてゐる例が相当に多いのであるが、平安時代までも保存されたのはマスミ・トガ・タツキ・ツノ等の形だけであつて、他の一方は亡びてしまつたのである。

一般に、同一物に複数の呼称が存したとき、それらに位相差がない場合は、互いに戦い合つて、一方が消滅するか、部分的な変容

をおこすのが道理である。したがって、有坂博士の言説に従えば、奈良時代の文献に「をととひ」が見出されていないので、その当時、「をとつひ」が単独で行われていたと考えてよいであろう。ただし、「をとつひ」と「をととひ」とは、《u》と《o》の相通が可能なため、久しい慣用の末に、「をとつひ」が「をととひ」に交替したのである。

(三) 平安時代の文献に盛んな「をととひ」について

先掲の図3では、「オトトイ」が、東日本と九州とに大きく分かれて分布することが、見て取れた。「オトトイ」の《o》連母音が同化して形成された「オトテ」は、九州の西南部に見られる。他方、東日本の主に関東地方の各地にも、「オトテ」が分布している。北海道については言及をひかえるが、全国各地に「オトトイ」類の方言事象が分布しているということによって、相当に古い昔に、「オトトイ」が近畿の中央部で使用されていたことを考えさせてくれる。それは、いつごろのことであつたのであろうか。

たとえば、天曆五年（九五二）村上天皇の勅により撰進したといわれる『後撰和歌集』（恋、83）の詞書には、次のように書かれている。

をととひなんかへりまうでこしかど、心地のなやましくなん
ありつる

また、天延三年（九七六）ごろに成ったとされる「かけろふ日

記」には、

みづからの、^{せと、ゆめ}「昨日の夜みたる夢、みぎの方の足のうらに、
をとこ、門といふ文字をふと書きつくれば、おどろきてひき
いるとみしをとへば
とある。

また、長徳元年（九九五）の「枕草子」（296段）には、
交野の少将もきたる落窪の少将などはをかし。昨夜・
「昨日の夜もありしかばこそ、それをもかしけれ。足洗ひた
るぞにくき。きたなかりけん。

風などの吹き、あらあらしき夜来たるは、たのもしくて、
うれしうもありなん。

とある。少将の行爲について書かれている箇所であり、「をとと
ひ」は品性の低くない語であろう。

次に、平安時代中期とされる「源氏物語」の空蟬の巻にも、
「をととひ」が見える。密かに暁月夜に、空蟬と見まちがえて訪
ねてしまった源氏に対して、さらに女房達が彼を、民部卿と思ひ
こんで、小声で申し上げるところである。

このおもと、さし寄りて、

「このおもとは、今宵は、上にやさぶらひ給ひつる。」^{せと、ひ}「昨日
より腹を痛みて、いとわりなければ、下に侍りつるを、」^{せと、ひ}「人
ずくななり」とてめししかば、昨夜、まうのぼりしかど、猶
え堪ふまじくなん」と憂ふ。

また、平安後期の「和泉式部日記」には、

御らむじてあはれとおぼしめして「こゝにも」とて、

をふことなくて過ぎにしをと、ひと昨日とけふになる
よしもがな

とおもへどかひなくなん。「猶おぼしめしたて」とあれどい
とつつましうて、すがすがしうもおもひたためほどは、たゞ
うちながめてのみ明かし暮らす。

とある。この「をと、ひ」の見える歌は、敦道親王の作である。

また、口語性の強い歌謡で、平安末期に成ったとされる「粟摩
秘抄」には、

○わかこそはおとひみえすきのふこす、けふおとつれなく
はあすのつれつれ
とある。

次に、平安末期の嘉承二年（一一〇七）〜永久四年（一一一
六）に成立したとされる「綺語抄」には、

山のかひそこともみえずをととひも、きのふもけふもゆきの
ふれれば

とあり、「万葉集」（302番）では「をとつひ」と出ていた同
じ歌が、ここでは「をととひ」と改めて掲載されている。何らか
の理由で、「をととひ」の公共性の強さが存したのであろう。そ
れゆえ当然のことだが、平安時代末期の「前田本・黒川本 色葉
字類抄」△治承四年（一一八〇）▽には、

一昨日 ヲト、ヒ

のような訓が与えられているのである。

このように、平安時代の諸文献を見るかぎり、「をととひ」ば
かりが使用され、それが標準語でもあったことが分かるのであ

る。では、同じ近畿地方で、奈良時代に栄えた「をとつひ」が、どうして文献上に現れて来ないのであろうか。それが、不思議に思えてならない。

(四) 鎌倉時代から明治時代にかけての文献に見られる「をとつひ」について

南北朝の貞和二年（一三四六）ごろに成立したとされる慈円撰の『拾玉集』には、

すずむかなきのふもけふも「昨日そとけふもいた井のしみつ野沢まつかけ
とある。

室町時代では、キリシタンの宣教師の残した文献が客観的な記述として参考になろう。慶長八年（一六〇三）刊の『日葡辞書』（注）には、

Votoloi ヨトトイ（一昨日）一昨日。

とある。この辞書に掲載された語句については、布教を目的とした編纂意図が、色濃く反映しているはずである。この点について、巻頭の解題では次のように記述している。

当時日本において、方言の分裂に対して京都語を標準語とする規範意識が強まりつつあったので、イエズス会も宣教師の話言葉は京都語と規定した。また、社会的混乱に反撥して敬讓意識が高まって、礼法を厳守する世情であったので、その実態に即応して、宣教師は言葉遣いの品位なり敬讓表現

なりを体得するよう求められた。

イエズス会の宣教師が習得すべき話し言葉は、各地の方言でなく、当時の京都の標準語とする、と定められたという。

そうであれば、次のロドリゲスの『日本大文典』（注）（慶長九年（一六〇四）〜十三年（一六〇八）に載っている文例、語例も、京都の標準語に近いものと考えるべきであろう。

Yamabuxino quinqie couauxixie votoloino curefodoni yamabuxi

cunifodo quite caquerarari.（山伏の禁制にはくして一昨

日の暮程に山伏九人ほど切つて懸けられたり。）（20頁）

○Oujo（今日）。）Mainichi（毎日）。Figotoni（日毎

じ）。Connichi（今日）。Quino（昨日）。Sacjite（昨日）。）

Votoloi（一昨日）。San votoloi（一昨昨日）（注）（295頁）

標準的な話し言葉において「をとつひ」が使われ、文学作品や和歌の贈答においても、前代以来の「をとつひ」が使用されたようである。もはや、奈良時代の「をとつひ」は、記録文献の上から姿を消してしまったと言えるほどである。

江戸時代においても、文章語や口頭語を生かした文学作品には、「おととひ」しか出てきていない。たとえば、享保十八年（一七三三）ごろの浄瑠璃「源平布引瀧」（『浄瑠璃集』下）で

あほう律義で金儲しらぬわる達子。あた（注）面倒な去んでくりよ。

ハテまあ遊んで一本まいれ。イヤ又馳走（注）に逢より。地色ウ（注）一昨日来ましょと足早に。いふ事共はげ天（注）恐帰らぬ内と、フ

シ出て行。（85頁）

のようである。また、文化六年（一八〇九）から文化九年（一八二二）になった式亭三馬の『浮世風呂』にも、

コウ、お三味さん。おめへ「昨日（オトテへ）何所（どこ）へ行った。」

とある。

江戸後期の京都や丹波の訛言を記録したと言われる『丹波通辞』にも、

「昨晩（おとむね） きのふの晩と云

とある。

さらに明治四年（一八七二）の仮名垣魯文による『牛店雑談 安愚楽鍋』には、

風爐（かまど）の注文ながら「昨日（おとひ）ちよっくらよりやしたら、外（まへ）をとある。

以上のように見てくると、遷都の影響を受けることなく、鎌倉時代から明治時代に至るまで、記録された文献中には、「をととひ」だけが登場するのである。江戸時代の滑稽本の中の会話にでも、「をととひ」が使用されている。奈良時代の「をととつひ」は、全く、消えてしまつて、次代に継承されなかったであろうか。それにしても、図3で見た「オトツイ」の隆盛な分布と文献上にそれが記録されていないこととの関係を、どのように説明することができるのであろうか。

三、地理的分布から見た「オトツイ」と「オトトイ」——方言辞典に照らして——

上述のように、「万葉集」に「をととつひ」が存したのに、千年近くの間、全く、文字や記録物からその語が消えてしまったように見える。しかし、どうして、西日本では、今日盛んに「オトツイ」を使うのかという問題について考えて見なくてはならない。奈良時代の「をととつひ」は、一旦消滅してしまい、近代に入ってから新しく「オトトイ」からの変化によって「オトツイ」が生じ、それが急速に伝播したと考えるべきであらうか。

筆者は、先の図3における「オトツイ」の分布が西日本に広く認められるのを見て、これは近代になってから、京都を中心に伝播した結果だとは、とても考えられないと判断した。「オトツイ」の分布が近畿から四国、さらに九州へと、切れめなく連続している事実は、長年月の言語伝播の累積を知らしめるのに十分である。「オトツイ」の分布の西端が九州の東半に見られるが、ここでは「オトツイ」が「オトチー」に音訛し、土地らしい変形を生んでいる。これなども、「オトツイ」が近代になってからの急速な伝播によるものではないことを物語っている。

それでは、歴史的な古文獻や古記録には「オトツイ」が記録されないということであれば、明らかに「オトツイ」は、口頭語あるいは方言と見なされているものにちがいない。

現に、標準語としては、「おととい」が通用しているわけであ

る。江戸語が東京語に変わるとき、関東地方に広く「おととい」が行われていたことは、先述の文献でも了解された。したがって、史上に「をととい」しか浮きあがって来ていないけれども、筆者などは、庶民の言語生活の根底に、「をととい」が存したと考えたいのである。

そこで、「おととい」を、まさに誰もが認める俚言、あるいは方言であると知りつつ、なおも口頭語の生活において、その「おととい」を使い続けてきた千年の「無記録生活誌」について、考えてみたいと思う。それは、地理的な広がり、即ち時間的な隔りであるという言語地理学の原理に従って、東日本から西日本へと、「おととい」の存在を確認してゆく作業となる。

○おとついな 一昨日。(廣田貞吉『佐渡方言辞典』昭和四十九年(一九七四)、○オトトイまたオトツイ 一昨日。(荒垣秀雄『北飛驒の方言』昭和七年(一九三二)、○オトツイ 一昨日。(菊沢季生『国語学論集五卷』古川町の方言』昭和六十四年(一九八九)、○おととい ^トハわるし。おと、ひがよし。(柴田虎吉『宮訛言葉の掃溜』文政四年(一八二二)、○オトツイ (名) 一昨日。オトツイ・あんべがわるくてねとった。三河、豊橋市松葉町、碧海郡桜井村、尾張部にも行はる。(黒田敏一『愛知県方言集』昭和九年(一九三四)、○オトツヒ 一昨日。(加賀治雄『尾張乃方言』昭和六年(一九三二)、○をとつひ ヲトツイ。(鈴木服『雅語訳解』文政三年(一八二〇)、○オトツイ おととい。一昨日。(藤谷一海『滋賀県方言調査統編』昭和五四

(一九七九)、○オトツイ 一昨日。時にはオトトイとも云う。(新藤正雄『大和方言集』昭和二十六年(一九五二)、○おとつひ 一昨日。紀北。(神坂次郎『紀州の方言』昭和四十五年(一九七〇)、○をとつひ 一昨日也江戸でおとといとなる(作者不詳『浪花聞書』文政二年(一八一九)ごろ、○おと、ひ。おとつひ(安原貞室『かたこと』慶安三年(一六五〇)、○おとつひハ 一昨日(おととい)なり(作者不詳『男重宝記』元禄六年(一六九三)、○おとつひ「**おと**」**名**おととい。一昨日。(榎宜田竜昇『淡路方言の研究』昭和六十一年(一九八六)、○おとつひ ◎おととい。一昨日。石・隠・全部。おとちー◎出・全部。(広戸惇・矢富熊一郎『島根県方言辞典』昭和三十八年(一九六三)、○ヲトツイ「ヲトトイ」一昨日、をととひ。ヲトツイモドリました。(一昨日帰って来ました)(岡野久胤『伊豫松山方言集』昭和五十年(一九七五)、○オトツイ**名**暦時一昨日(全普中)○オトトイとの言いかたもあるが、これのおこなわれることは、かくだんにすくない。**分布**内海全域オトトイ 内海全域(藤原与一『瀬戸内海方言辞典』昭和六十三年(一九八八)、○おとつひ おととい。一昨日。(富田義弘『下関の方言』昭和五十二年(一九七七)

さて、以上のように、「オトツイ」の言い方は、西日本のほぼ全域に見出された。しかも、愛知県や岐阜県など、中部地方の隣接諸県にもこれが見出された。しかし、九州地方の方言辞典には、探索しえた文献がすくなかったために、「オトツイ」が見出

せなかった。他方、「オトツイ」については、明治以後の学校教育の普及にともない、共通語が「おととい」であるという判断が定着して、すでに早くから全国に、これの安定した使用が見られるようである。

ところで、「オトツイ」が、愛知県以西に隆盛であった。これが、方言辞典の中には、はっきりと記されているのである。したがって、文章語の領域では記載されていなかったけれども、話しことばの中では、特に「方言」として、「オトツイ」が強く意識されていたことになるのである。こうして、「オトツイ」は、待遇品位が高いものとは言えない存在であったために、暗れがましい文章語の世界からは遠いところで、根強く生き延び、生き続けたのであろう。

まとめ——「オトツイ」と「オトトイ」との譲り合い——

方言の変化は、各地の地理的及び歴史的事情に即して独自のあり方を示しつつ、日本語方言全一体の摂理に適うように、行われているものである。

そこで、要になる地点で、「オトツイ」と「オトトイ」との張り合い関係を見つめ、それらの解釈と歴史的文献の結果とを総合して、調和のある結論を得たいと思う。

さて、先に「オトツイ」と「オトトイ」との接触する東日本での要地の一つとして、愛知県地方の「一昨日」について、分布の考察を試みた。

今度は、中国地方で、「オトツイ」と「オトトイ」とが激しくぶつかり合っている瀬戸内海地方の老少の方言地図について、とりあげてみたい。藤原与一先生著『瀬戸内海言語図巻』の中の項目「一昨日」について、地図の解説書では、次のように述べておられる。

老年層図では、「オトツイ」「oosai」と「オトトイ」「oosai」とが、全域に見られる。兵庫県西部域・愛媛県西部域・九州では、「オトトイ」が、やや優勢である。少年層図は、老年層図のほぼ同じ状況を見せている。少年層で、「オトツイ」「oosai」のいきおいが、かならずしも、弱くなっている。

実際に『瀬戸内海言語図巻』の少年層図で、「オトツイ」の分布を確認してみても、それは決して、共通語の「オトトイ」に負けてはいないのである。脚注を見ると、老年層図で、「オトツイ」について、《もう少し年とった人が言う》と説明したのが四地点、《昔は言っていた》が一地点に見られる。同じく、《古くからのことば》だとするのが五地点に見られる。少年層図については、「オトツイ」を《おとなが言う》とするのが二地点に見られた。両事象の隆盛な分布状況と説明の文言から推して、瀬戸内海地方での「オトツイ」は、共通語の「オトトイ」と肩を並べて同等に使用されているということが分かる。

では、「オトツイ」の分布領域（近畿・中国・四国・九州東半）を遙かに西南へ出はざれた地域について見てみよう。中本正智氏は『図説 琉球語辞典』で、「オトトイ」系事象に属する諸

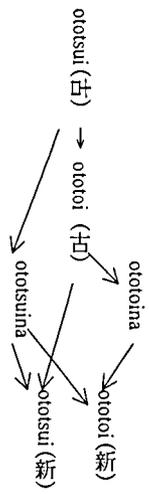
事象(ウトウトウイ系、スットウイ系、フトウトウイ系の諸事象)についての詳細な分布を示された。その中で、氏は全日本の「オトツイ」と「オトトイ」との分化を、次のように解釈されている。

* wotupji → wotouphi → wotsuʔi → otosui (中央型)
 ↓ wotouphi → wotoʔi → ototoi (周辺型)

このような推定をなされ、宮古池間島のミーカナイは wotupji よりも以前の古層語だとされた。

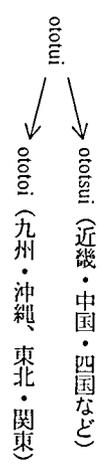
中本氏の解釈は『日本語地図』の現在の方言分布を客観視しての、絵画的なとらえ方だと察せられる。また周圈論的な解釈と見なしてよいものでもあろう。

さて、今度は新潟県の『糸魚川言語地図』^{注14}を解釈した文章について次に掲げよう。柴田武先生は、『解説編』の中で、当該地方



での事象の変化過程を次のように示された。

新古についての話者の説明を重視しつつ、方言分布がていねいに読んであり、それゆえに複雑な図表となっている。そして、「ついでに……」として、「おととい」の全国分布の変化過程が掲げら



れている。

そして、周圈論的な解釈はあたらないとし、

糸魚川地方は、まず西から ototsui の洗礼を受け、のちに ototoi を迎えることになる。ototsui が古いことは、これが新潟県西部に散在し、佐渡島にも分布していることから推定できる。

と論述された。

筆者は以上のお三方それぞれの解釈の長所を十分に受けとめたいと思う。そして、『日本語地図』の解釈および野元菊雄氏の解釈なども、それぞれのお手持ちの資料を整理した上での個人的な言語学的解釈として、立派なものだと思われる。

しかし、上述したように、奈良時代に存した「オトツイ」がどうして「オトトイ」に先を越されて全国に伝播したのかということや、それに伴うことであろうけれども、平安時代以降の文献に「オトツイ」がほとんど全く、記録されなかったのはどうしてか、ということが解釈されていない。音韻変化の法則を適用した図表の作製だけでは、すまされないところがある。ことばの持つ重み、ことばの使用者の側からの視点で、言語史の屈折部分について光を当てた説明が必要であると思われる。

そこで、筆者は、不十分ではあるけれども、次のような小考

と書いている。(『日本国語大辞典』の「おとつゝい」の項からの引用に依る。『二葉亭四迷全集』第一卷(昭和三十九年、岩波書店)でも、「ハイ一昨日そとつひの晩いひました。」とある。確認。)

江戸時代の『浮世風呂』でさえ、野暮なことはとしての「オトツイ」を使いはしなかった。やはり、粋な世界を写すのには、それにふさわしい「オトトイ」や「オトテー」の方が好まれたのである。八丈島や佐渡島にも「オトツイ」は色濃く分布しているのであるからには、東日本への伝播速度が遅いといっても、江戸時代の関東人が「オトツイ」を耳にしていなかったとは言えないはずである。それは、当時の方言を解説した「かたこと」に、「オトツイ」が記されていることによっても知られるのである。

今日では、文章体としての「オトトイ」と方言会話体としての「オトツイ」という区別はなくなって、共通語文体としての「オトトイ」と方言会話体としての「オトツイ」との区別が変わった。ある地方では、「オトツイ」と「オトトイ」との音韻的な似かよりに、どちらが共通語かさえ、頓着しない人々もいるようになったのである。

先の図2において、少年層者が「オトツイ」を好んで使用し、その分布が東へ伸び、静岡県地方へ広がっていることを指摘したが、これなどは、すでに先兵が八丈島や佐渡島、あるいは北海道にまで達しているところを、地道にゆっくりと追いかけていく過程と解することができるのである。

おわりに

愛知県地方の方言分布を解釈するつもりであったが、一つの地方は、全日本とつながっているもので、いきおい、日本全体の方言分布と関係づけて考えざるをえなかった。また、「一昨日」という語の、現在の方言状況だけから、方言の歴史的推移を解釈しようと思ったが、現在が歴史的現在であることを考えると、どうしても、古い文献を渉猟しないで、ものを言うこともできず、若干の文献調査を行った。こうして其時的に、筆者なりの考察を試みた。もはや、単純に周囲論を当てはめることができないことは了解されたと思う。しかし、それが、まんざら不可能ではないことも、上述の説明でこと足りるであろう。その意味では筆者の解釈は、どなたの説とも少しずつ異なるものなのである。

ところで、柴田武先生が「オトツイ」や「オトトイ」に、新しいものと古いものとを区別して解釈されようとしておられたが、それはどうであろうか。全国視野で論じるときには、それは、いさ少し再検討すべきことかもしれない。

筆者の結論は、先述のように、「オトツイ」と「オトトイ」との使用場面の相違によって話体差(文体差)が生じ、それが全国への伝播の際に、遅速の差を生んだのである。ただし、明治期における「オトツイ」と「オトトイ」との使用状況について、もう少し詳しく資料に当たって証拠を固めなくてははいけないが、それは今後の課題である。

- (注1) 国立国語研究所編『日本言語地図』(Vol. 6・大蔵省印刷局、一九七四年)
- (注2) 徳川宗賢編『日本の方言地図』(中央公論社、一九七九年)
- (注3) 静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編『図説 静岡県方言辞典』(吉見書店、一九八七年)
- (注4) 大槻文彦著『新訂大言海』(富山房、一九五六年)
- (注5) 久松潜一監修『新潮国語辞典 現代語・古語』(新潮社、一九六五年)
- (注6) 橋本進吉『国語音韻史』(岩波書店、一九六六年)
- (注7) 有坂秀世『国語音韻史の研究 増補新版』(三省堂、一九五七年、四二三頁)
- (注8) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、一九五五年)
- (注9) ロドリゲス著・土井忠生訳『日本大文典』(岩波書店、一九五五年)
- (注10) 名古屋蓬左文庫編『名古屋叢書三編第一五巻』(名古屋市教育委員会、一九八六年)
- (注11) 藤原与一著『瀬戸内海言語図巻』(東京大学出版会、一九七四年)
- (注12) 藤原与一著『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』(東京大学出版会、一九七六年)
- (注13) 中本正智著『図説琉球語辞典』(力富書房、一九八一年)

(注14) 柴田武者『糸魚川言語地図』(上巻、秋山書店、一九八八年)

(一九九〇年十一月二十日)

(補記) 初校の段階で、浜田敦氏の重要なご論考(「おと」と「おとつ」)(『国語国文』49-6、昭和55年6月)の存することを見落としていたことに気がついた。これはどうしても見逃せないものであった。氏は、すでに、『日本言語地図』や『日本の方言地図』の解釈に対して厳しい批判をされている。そして、氏は、「おと」とい」が京都語において姿を消す理由を、次のように解釈された。

江戸中期ごろを境として(中略)日本語の「標準」の規範をきめる権威を荷っていた京都の「老人貴族」が没落するとともに、それまで底流にあった、しかし、より多数の、京都、畿内の「常民」のことはである「おとつ」が浮上して、言わば、京都、畿内「方言」の代表の位置を占めるに至ったと解釈すべきではないかと思う。

氏の取り扱われた『捷解新語』などを、私は、見ていないが、扱った資料のちがいを越えて、「オトツイ」と「オトトイ」との消長に、私のとかなりな似よりが見られたのは、興味深い。

文献国語史の大家のお説と、方言研究の学徒の愚説とが類似したからといって、研究史上、たいしたことではないと、人は言われるかもしれない。しかし、私は、別のことと心得ている。即

ち、これは、本発表を契機として、方言地理学が、もはや、語の新古をのみ論するときにも、社会的運用の視点を無視してはできなくなつたことを、知らしめたものである。二つの研究結果の部分的な一致は、学問の方法が異なるものの、必然的な一致として、注目すべきものといえよう。

(一九九一年三月十八日 付記)